107. 重症肝炎ならびに慢性肝障害の急性増悪時におけるAFPの臨床的意義

熊本大学　第3内科
中川　昌壮　　藤山　重俊

〔目的〕 急性および慢性肝疾患の長期経時的観察例における α-Fetoprotein（以下 AFP）の動態から，とくに重症肝炎ならびに慢性肝障害の急性増悪時におけるAFPの臨床的意義について検討した．

〔検索方法および検索対象〕 AFPの測定はRIA法を中心にMO法，SRID法，IES法（Kohn変法を含む）などを併用し，過去約3年半に経験した急性肝炎82例，亜急性肝炎7例，慢性肝炎161例（活動型92例），肝硬変症107例などを対象として臨床経過を追って経時的に測定し，他の検査所見，組織像，予後などと対比検討した．

〔結果ならびに結論AFP〕 20ng/ml以上を陽性とした場合，急性肝炎22.0%，亜急性肝炎42.9%，慢性肝炎33.5%（活動型42.9%），肝硬変症32.7%に検出した．また経過中1,000 ng/ml以上を示したのは，亜急性肝炎2例，慢性肝炎3例，肝硬変症4例であり，これらのうち慢性肝炎の1例と肝硬変症の2例は肝癌の発生を認めた．亜急性肝炎でAFP陽性3例のAFP値はそれぞれ最高63，1280，1800 ng/mlであったが，陰性の4例と共に全例死の転帰をとった．一方，慢性肝炎の急性増悪時にトランスアミナーゼのピークにやや遅れて最高10,825ng/mlまでAFPの上昇をみた例では，トランスアミナーゼの消長とよく一致し，約9ヶ月後に全く正常化し，順調な経過をとっている．本症例の腹腔鏡所見は斑紋結節肝で組織学的にはかなり高度の活動性病変を呈した．また肝硬変症で12,200ng/mlまで上昇し，それをピークとして現在下降しつつある症例もあり，慢性肝障害でのAFPの高値は，肝癌併発を除外できれば必ずしも予後悪化の指標とはいえず，むしろ再生能の点から予後良好の指標となるものと考えられ，臨床的に意義がある．

108. 呼吸停止下肝シンチフォトグラフィ（微小病変の検出と体位変換による肝形態学的変化）

金沢大学　核医学科
桑島　　章　　油野　民雄　　利波　紀久
久田　欣一

〔目的〕 シンチカメラを用いて呼吸停止下シンチグラフィを施行し，第1に被験者の呼吸性移動により生ずる肝シンチ限局性病変の検出能に関する影響，第2に体位変換による肝の形態学的変化を観察し肝シンチ欠損部の質的診断（肝内性が肝外性か）の可能性，肝硬度の変化に伴う肝形態変化との関連性の有無につき検討した．

〔方法〕 ^{99m}Tc-スズコロイドならびに^{99m}Tc-フィチン酸10—15mCi静注20—30分後に15—20秒間呼吸停止下にてPho Gamma ⅢまたはPicker Dynaカメラを用いてシンチグラフィを施行．限局性病変の検出能に関しては，通常呼吸時と呼吸停止下のシンチグラム像を対比し，体位変換による検索では，種々の体位での主として前面像と右側面像につき検討した．

〔成績ならびに結果〕 限局性病変の評価に関しては，通常呼吸時のシンチグラム像より，呼吸停止下シンチグラム像の場合より明瞭な欠損像が認められ，特に通常呼吸時のシンチグラム像でequivocalと判定された例で呼吸停止下像で明らかな欠損像を呈した．

体位変換による肝の形態的変化に関する検索では，正常，病的例共，体位変化により肝脾の回転移動の結果生じたと思われる右デクビタス前面像での脾RI活性の増加，左デクビタス前面像での肝右側RI活性増加所見を呈した．肝欠損部の性状に関しては，胆嚢床，肝静脈，腎圧痕など生理的肝外因子の場合体位変換により欠損部の消失を認めたのに対し，肝内true massの例ではほとんど変化を示さなかった．また，肝硬度に関しては，体位変換により著明な形態的変化を呈した正常例に比し，肝硬変症など肝硬度の増加例では形態的変化に乏しかった．

Presented by Medical*Online